
魔法少女リリカルなのは ～世界を変える者～

八雲 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～世界を変える者～

【Nコード】

N2175Q

【作者名】

八雲 葵

【あらすじ】

さまざまに道を変え、生きていった青年は桜の少女と出会いひとつの道を定めた。

その果て、青年は少女の願いを携え異世界へとわたる。

そして、出会うのは・・・

プロローグ（前書き）

新しく一新しました。

すこしでも、形になったらいいです。

良ければ、読んでください。

プロローグ

それは、ひとつの物語。

錬鉄の英霊、魔術師殺し、殺人貴。その三人と交流を持ち、彼等と良く似た生き方をした青年がいた。

彼は魔術殺しのように『正義』に絶望し、でも錬鉄の英霊のようにひた向きに信じ、それを行った。しかし、世界は彼を拒絶しひとりの少女が彼を受け入れた。

それ以来、彼は『正義の味方』を辞めた。

ただ、彼女のためにと。闘った。

「ごめん、なさい」

少女は涙を浮かべ、術式を走らせる。

「構わないさ」

まるで彼女の壁になるかのように彼はたっていた。その体には槍や剣などが無数に刺さり、明らかに致命傷だとわかる。でも、彼の顔に絶望はない。

「はやく、行け。ここは、オレが食い止める」

ウイン

どこからか、出した白と黒の剣を両手に持ちすでに戦える体ではな

いのにも関わらず、彼は歩き出す。

「そんな体で!!」

「オレは大丈夫だ。はやく、術式を!!」

「ダメだよ、だってアナタが死んじゃう」

たしかに彼はこのままでは死んでしまう。
しかし、彼としてはどうでもいいことだった。

「かもな。だが、いいさ」

「えっ!?!」

「オレは本来ならもうとっくに死んでいた身。なら」

パシン

「そんなこと言わないでっ!!」

青年の頬を叩いた。

「ボクだって、君に助けられなかったらいまここにはいないんだよ
?」

「――」

しばらく、漠然としていたがやがて手にしていた剣を消す。

「そう、だな。だがまあ、どちらにしろオレはここまでだ」

体にはえた武器を見て、苦笑する。

たしかにこれではよほどの治癒魔術でも助かる確率は絶望的だろう。

「大丈夫、アナタは死なせないから」

「え？」

突然、彼女をおおっていた術式が彼に移る。

「お、おい!!」

「ごめんね？ボクもアナタには死んでほしくないんだ」

まるで儚い花のような笑顔をうかべ、手にした黒鍵を支点に術式を発動させる。

「やめろっ!!」

「ダメだよ、もう決めちゃったから」

あわてて止めようとするがすでに遅い。

術式はすでに発動し、止まる気配はない

「だから、せめてのお願い」

「やめろっ!! 頼む!!」

「あちらの世界でもボクを頼むね？悠くん」

「さくらっ!?! やめ」

ウイン

完全に彼はあちらに転移した。

——ふう、間に合った。

ボタン

少女・・・さくらはその場に座り込んでしまう。

——せめて、悠くんだけでも助けられた。

良く見ると、彼女の顔は青く、体はボロボロだ。

しかも、背中には何本か剣が刺さっている。明らかに致命傷だ。

——これでよかったんだ。でも・・・、でも

彼女の頬に涙が伝う。

——でも、もうすこし一緒にいたかったな。悠くん

そう願わずには居られなかった。

さくら「あちらのボクをお願いね」

それを最後に彼女は事切れた。

これは桜の魔法使いと呼ばれた少女の終わり。

しかし、物語はここから始まるのだ。

さあ、語るとしようか。これは水無月悠二のたどる数奇な物語。
さて、このさきに待つのは希望か？絶望か？

それは、神にもわかりはしない

一話

「さくらっ!!」

さくらの第二魔法で平行世界に飛ばされたオレだ。気がつく、オレはどこかの森で倒れていたみたいだ。

——さくら・・・

本来なら、ここにきていたはずの女の子。

また、守れなかった。

——いや、考えるのは止そう。きつと、アイツは喜ばない。

しかし、体に違和感があるな・・・。

さつさと現状把握するのが先決だな。

目を閉じて、イメージするのは撃鉄。それをひとつだけおこし、落とす。

体に鈍い痛みが走り体を分析する。

まず、身体

——身体…外的損傷なし。戦闘に支障なし

——神経、内臓ともに異常なし

次は魔術回路だ

——魔術回路…27本正常稼働

——魔術刻印…リンク正常

——魔力量…正常

――警告…肉体年齢が低下（7才）

はあ？

なんで肉体年齢が下がってるんだ？？

――まあ、いい。考えないようにしよう。身体は成長する。

さて・・・と、まずはこの世界がどんなのか確認しなくちゃな。
まあ、どちらにしろ。まず金だな。

たしか、礼装のなかにいくつか宝石とかが入っていたはず・・・

「あったあった」

ちゃんとあった。

しかし、換金しなくてはならないので直接的な解決策にはなっていない

しかも、服に至ってはサイズがあっていないためにかなりブカブカだ。さくらにつくってもらった聖骸布の外套なんて引きずってしまっている。これでは悪い意味で注目の的だ。

「はあ」

とりあえず、着ている外套を脱ぎ畳む。とりあえず、魔術で内部が拡張されたウエストポーチに放り込む。

いまは下に着ている普通の私服だ。

血だらけの外套を着た七才児なんてただのホラーだ。

幸い、季節は冬じゃないみたいだからな

「さて、と行くか」

帽子をかぶり、歩き出す。

なんで、帽子をかぶるかというのと、オレの容姿にある。

以前は、金髪碧眼だったが『世界』の影響で白い髪に赤い瞳になってしまってるからだ（イメージとしてはアチャ子さんです）

いざとなれば、ニトクリスの鏡でカモフラージュするか

なんで、オレがニトクリスの鏡を使えるかというと、簡単だ。ネクロノミコン死霊秘宝の写本がオレの魔術刻印に刻まれているからだ。

資料で見たオレがおなじ死霊秘宝の魔刃鑄造を便利だなくとか漏らしたらさくらに組み込まれた

そうだな、出来るか試してみるか

「バルザイの堰月刀」

フウンとわずかに刻印がひかり、手元に特徴的な形をしたバルザイの堰月刀が姿を表す。杖にも、剣にもなる便利武器だ
しかも、身長に合わせられるから助かる。

ブレードオン
「魔刃鑄造」

さらに一小節の詠唱で形を自由に変えられるのもおいしい。
今回は護身用のナイフだ。

ちなみにあちらでは魔刃鑄造をつかって金儲けをしていた。
まあ、今回はそうはいかないだろうけどな

シュイン

ナイフになったバルザイの堰月刀の刃をしまうと懷にしまい、歩き出した。

しかし、この街は魔力を持った奴が異様に多いな。いま、感じただけで五人は居る。

魔術師だろうか？

まあ、魔力殺しはつけているからよほどでなければ心配ないがな。

さて、まずは今後をどうするか決めなければな。

おそらく、ここは『さくら』の故郷だ。

――勘だが。

拠点は・・・最悪『写輪眼』をつかって暗示をかけて手にいれるか。良心は咎めるが仕方ない。

生活資金は暗示をかけて、持ってる宝石や貴金属を売却しよう。

ちなみに時刻は夜だ。正確は時間は知らんが月が出ているからな。

しかし、目立つな。

――まあ、時間が時間だから仕方ないが。

とにかく、しばらく歩き観光用の案内板のようなものを見つけた。特徴的な三日月型の島。見間違えるわけがない、やはり『さくら』の故郷『初音島』だ。

なら、話は早い。

芳乃の家にいけば、子の世界の『芳乃さくら』がいる。

あいつの『遺言』だからな

とりあえず、今日は野宿だな。

そうおもしろい、地図で見つけた公園に向かう途中であるものを見つけた。

「ヒヒヒ・・・」

下卑た笑いを浮かべる金髪オッドアイの少年だ。顔立ちは整っているが、浮かべる笑みのせいでお世辞にもカッコいいとは思えない。

——無駄に高い魔力を持っではいるがな

しかし、あちらはオレに気付いた様子はなく素通り・・・するかとも考えたが、石を二、三個投げると走り去った。

理由は、気持ち悪かったから

「ぐべっ!?!」

——そんな蛙を潰したような音がしたときは留飲が下がった。

しばらく走ると目的の公園についたわけだが、とりあえず地面に手を当てる。

「——解析、開始」

周囲一体を解析し、寝床に良さそうな木を探す。

——あつた

しばらく歩くとわりと簡単に見つけられた

とりあえず、登り太い枝に腰を下ろすと幹に背を預ける。
警戒を解くと、瞬く間に睡魔が襲う。

やはり、かなり疲れていたみたいだ。まあ、無理もない、か。

オレはそんなことを考えながら眠った。

二話

「ん・・・」

目を覚ました。

木の上で。まあ、野宿したからなんだが

——まあ、野宿は慣れてるからいいが
木から降りると身体を伸ばす。

さて、と今日も一日頑張りますか

「よつと」

スタツ

寝ていた木から降りる。うむ、ずいぶんと遅くまで寝ていたみたい
だな。

かなり高い位置まで太陽が上っていた

——時間的には昼前だな

軽く柔軟体操して、歩き出す。

だが、問題がない訳じゃない。なぜならオレの髪はさくらの趣味で
まるでどこぞの錬金術師のように三つ編みでかなり長いからだ。
悪い意味で目立ちすぎる。

「ちょっと君？」

——げッ

そのせいか、国家権力に目を付けられたらしい。
まあ、早い話が補導だ。時間が時間だからなすぐさま、身体を強化すると走り去る。

補導なんてされたら嫌な予感しかない
強化したおかげでかなり早く巻けた。

さて、とあとは資金を調達だな

写輪眼で相手に暗示をかけて、宝石を買い取ってもらう。

これで、当面の生活費は足りるな。あとは拠点だが・・・

「ん？」

気がつくと、ある場所についていた。

「ここは・・・」

そこはひとつの民家。いたって変なところはない。
だが、表札には『朝倉』と書かれていた。

・・・どうやら、ここが朝倉家のようだ。
となると、隣にあるのは芳乃家か。

「マジか」

さらに横に目をやると、少し離れたところには中々に大きい武家屋敷があった。

見ると、売り家のようだ。

「欲しいな」

オレの趣味もあるが、立地条件がオレには都合がよすぎる。
芳乃家の近くだ

・・・だが、オレには金も身分証明書もない。

「致し方ないか」

仕方ない、奥の手を使うか。

覚悟を決めたオレは早速行動に移すことに。見た不動産屋を尋ねると、写輪眼で暗示をかけた。

オレがああ屋敷の相続人だということにし、書類一式を貰い受けた。諸経費もすでに払ったことにした。

良心が咎めるが仕方ないか

「へえ」

屋敷にはいってみると少しの間過ぎた衛宮邸に酷似していた。

いや、しかしよくこんな物件が売れずに残ったもんだ。

中にはまだなにもないが、それはこれから入れれば良さ。

「魔刃鍛造」
ブレイドオン

アゾット剣にバルザイの堰月刀を鑄造すると、家の四方に突き刺す。

魔力を流し込み、簡易的な結界を張る。

入った人間を特定するタイプのやつだ。

とりあえず、粗大ゴミ置き場にでもいくか。

〽三時間後〽

「ふう」

家の中庭に運び込んだ家電（粗大ゴミ）を解析して、一息つく。
結果からいえば、全部直せる。

壊れたことは投影するなり、バルザイの堰月刀で代用すれば良い
——我ながらなんとも無駄な使い方だ。まあ、辞めるつもりは毛頭ないが

「む・・・？」

作業に写ろうとすると、誰かが敷地に入った。結界は認識阻害も含んでいいるから普通の人間は入れない。ということは必然的に魔術に
関係した人間に限定される。

外套を纏い、向かう。

すると、玄関には数人の男がいた。
全員、魔力を持っている。

「我が家になにかご用かな？」

「君がここの家の主か？」

金髪で赤い目の少年が尋ねる。

どこか、かつて闘った黄金の英雄王を髣髴させるような外見だ。

「まあ、な。」

「そうか、僕は霧島恭治」

ギルガメッシュ似の少年が名乗る。

「オレは青島勇一」

赤髪の少年

「枢木直哉だ」

黒髪の子。三人とも、それなりに魔力を持ってる。

まあ、オレよりは少ないみたいだが

「水無月悠二だ、それで3人はなんのために我が家に？」

「単刀直入に聞こう。君は転生者か？」

転生者・・・？

なんのことだ？？

「悪いが、オレは転生していない」

「っ！？ではなにものだ？」

「あえて言うなら異邦人だ。信じないかもしれないが、平行世界から来たんだよ」

「「「っ!」」」

3人は驚愕した。

「まあ、そういうことだ。用はそれだけならお引き取り願おうか？」

「お前はなんのためにこちらの世界に来たんだ？」

「さあ、な。自分で考えな」

いうと、踵を返し中庭にあるきだす。話してやる義理はない。

「——悪いが嫌でも答えてもらう」

ジャキン

どこからか出した刀をオレに向ける直哉。

気付くと三人とも構えていた。結局、こうなるのか

「やる気か？」

「お前の返答次第だ」

「———そうか、なら魔刃鍛造^{ブレイドオン}!」

ガキン!

向けられていた剣を弾くようにバルザイの堰月刀を召還する。

「なっ!?!」

「ふんっ!?!」

シュイン

すぐさま、ナイフを取りだし、勇一の首にナイフを翳す。

「バ、バルザイの堰月刀だどっ!?!」

「形勢逆転だな」

ニヤリと笑いかける。

素人でもどちらが有利なのかわかるだろう。

「さあ、どうする?」

「なんで、お前がバルザイの堰月刀を持っている・・・!」

「いや、オレとしてはなんでお前らがバルザイの堰月刀を知っているのか気になるのだが」

こいつのことを知ってるのは士郎とかだけなんだが・・・。

「隙ありだ!天の鎖よっ!?!」

ジャラン

「ゲートオブバビロン王の財宝だどっ!?!」

放たれた天の鎖エルキドゥをナイフで弾き返す。
何で、こんなガキがギルガメッシュの宝具を!!

サギタ・マギカ
「魔法の射手!!」

「っちい!!」

勇一がはなった矢を偃月刀で弾く。
さらに直哉と恭治が切り込んでくるが甘い
戦いは隙を見せたらおしまいなのだ。

ブレイドオン
「魔刃鍛造」

手に身の丈ほどもある大剣として鑄造したをバルザイの堰月刀で防
ぐ。

「今度はリベリオンだと!?!」

「ほら、余所見をしている暇なんてないぞ」

アイシクルスラッシュ
——氷牙

カッチイン

それに宿したらイタクアの凍気で凍らせる。まったくもって、バル
ザイの堰月刀は便利だこれで、直哉はリタイアつと

「きさまあ!!」

ダダダダダダダダダダダダ

まるで雨霰のように宝具を乱射する恭治。
だが、甘い。

「フッ」

それを瞬く間にさけ、やつの間合いに潜り込む。

「眠れ」

「ぐふっ!!」

腹に柄を叩き込み、気絶させる。これで、二人。

勇一「ラステル・マスキル・マギステル・・・」

「馬鹿が」

——りもんちようちゅう裡門頂肘

ふつう、前衛もないのに詠唱になんて入るか？
まったく、ずぶの素人みたいだな。

まあ、にしては過ぎた力だが

「さてって、こいつらどうするかね？」

悩んだ末、適当に捨てることにしたオレは使い魔をつくり、そいつに放棄させるのだった。

しかし、こいつらの言っていた転生者って、なんだ？

三話

バカを捨てたオレは近くの服屋で洋服を買うと、それを着て、街に出ていた。

時間は午後の四時。活動する時間としては申し分ない。

念のために買った服には戦闘用の改造はしてあるし、空間拡張したウエストポーチには『奥の手』もはいつている。

——とりあえず、食料とかは買うとしますか。

近くの商店街で、安いスーパーでもないかなと探して歩いていると。

ブウン

オレの前を黒塗りの車が走り去る。

防弾防刃？

いつもの癖で解析して、知る。

どこのSPだよ
シークレットサービス

——どうも、嫌な胸騒ぎがするな。

トレース オン
「同調開始」

体に魔力を流し、各機能を上昇させる。

その状態で、走り出す。

しかし、まさか白昼堂々と誘拐か？

まさか・・・な

＊

「離しなさいよっ!!」

「へへへ、運が良いぜ。」

「ああ、まさかバニングスのガキまで手にはいるなんてな」

・・・本当に誘拐だったとは
あれから、車を尾行していたオレは使われていなさそうな倉庫についていた。

囲んでいる黒服は5人。

その近くの柱にはふたり、女の子が貼り付けになっている。

さて、どうしたものかな

——まあ、答えは決まっているけどな

「魔刃鍛造」
ブレイドオン

刀として、バルザイの偃月刀を鍛造する。

さすがに堅気な女の子がいるので刃は潰してある

来ている服は防弾なんかしてないただの服だが、まあ大丈夫だろう

タッ

空気中の魔力素を足場に固定して跳躍する。
体を強化しているが、わりと痛い。

——疾走居合い（ラピッドスラッシュ）

「ぐわあ!？」

すれ違い様に切り裂く（少し違うけど）。威力はまあ、見ての通りだ。

食らったやつが一発で意識が飛ぶくらい。

「な、なんだっ!!」

——エアトリック空中舞踏

「眠れ」

——スラッシュユレイン居合連閃

常人には見えないくらいまで加速し、鞘で殴ったのちに、切り裂く。
これで二人。

「く、くそがあ!!」

「鈍い」

——ジャッシュメントスラッシュ次元斬

次元すら切り裂くほどの居合で切り裂く。

これで、三人。

「ば、化け物!？」

「だからなんだ？」

——日輪脚

足を回転させるように敵をけりあげる。

「終わりだ。魔刃鍛造」
ブレイドオン

あらたに身の丈ほどもある大剣を鍛造し、振りかぶる。

「砕けろっ!!」

——兜砕き（ヘルムブレイカー）

「ひ、ひい!？」

最後の一人は、恐怖に顔を歪め、オレを見る。生憎、そんな視線には慣れてる。

「う、動くんじゃないえ!! 動いたらこいつを撃ち殺すっ!!」

残された男は錯乱し、拘束されたもう一人の少女に銃を向ける。
人質のつもりらしい

「ひっ!？」

だが、甘いんだよ。

——エアトリック空中舞踏

「ぐはあ!？」

瞬間、背後に移動すると手にしている大剣で斬り伏せる。

シュイン

手にしていた刀と大剣を消すと、縛られていたふたりの縄をほどく。

「大丈夫？」

「え、ええ。アンタは？」

「ただの通りすがりだよ。気にしないでいい」

——まあ、助けたけど関わりたくて助けたんじゃないしな。

「——名前ぐらい言いなさいよ」

あんな環境にあったというのに、健気な子だ。

「——そうだな、水無月悠二だ。覚えなくていいよ」

そう、名乗るとオレはあるきだしたのだった。

*

「――ねえ、アリサちゃん」

彼・・・水無月悠二が歩き去ってから少し後、私とすずかは商店街を歩いていた。

どうやら、家に連絡をするまえに彼が助けてくれたみたいで、助かった。

「ん？どうしたのよ」

「あの人、強かったね」

「ええ」

たしかに凄かった。

年は私たちより二つぐらい年上みたいかな？

帽子をかぶっていたから、よく見えなかったが白い髪に赤い眼をしていた。

「――それにしても、まともな男なんて久しぶりね」

「うん」

私たちの周りには、顔立ちは整った・・・いや、まるで作り物みたいに整いすぎた連中ばかりがいる。

しかも、なれなれしく接されずかなんて一時期、男性恐怖症にま でなった。

格言う私も、あまり男に対していい感情を抱いていない。

「――でも」

すずかはどこか、上気したような表情で見上げる。

「かっこよかったよね、あの人」

「――そうね」

いつにない親友の惚気ように苦笑し、私もあのことを思い出す。
誘拐され、希望も無いときにふらっと現れたまるで……御伽話の正義の味方みたいな

「――また、会えるかしらね」

「うん」

水無月悠二……それが私達の知る唯一の手がかり。
絶対に、探してやるんだから。

そう決意をしながら、私達は家に帰っていった。

まさか、あんなに早く再開できるなんておもってもいなかったけどね。

＊

二人を助けたオレは、スーパーで買い物し、土蔵の工房化に勤しんでいた。

ちょうど、根幹と成る魔方陣の形跡をすませると

「ん・・・？」

妙な魔力の流れを感じた気がする。

どこか、懐かしさを感じるような魔力の流れを。

「――ちょっと行ってみるか」

さすがにそのままでは寒いので、コートを羽織、オレは土蔵を後にした。

四話

妙な魔力を感じ、走り出したオレは気づくと桜公園にまで戻っていた。

そして、予感確信へと変わる。

「――さくらか」

さらに間隔を研ぎ澄まし、あたり一帯を解析する。
すると、やはり予想通りの結果が出てきた。

――霊脈からの人工的な支流を確認

「――やはり」

あちらのさくらから聞いた彼女の罪……。
もしかしたら、今日がその始まりではないのだろうか？

「――だとしたら、オレは……。!!!」

――はたして、オレにとめられるだろうか？

孤独の辛さはわかつている。ひとりとは、それほどまでに自分を食
い殺すものだということも理解しているつもりだ。

だからこそ、オレには止められないのかもしれない。

だとしたら、とんだ腰抜けだな。

日はすでにおち、あたりは冷えてきてる。

「――いた」

魔力をたどり、オレはたどり着いた。

――枯れない桜。そう呼ばれている聖杯によく似た不完全な願望機。

そして、その根元にオレは三人の人影を見つけた。

一人は、金色の髪をツーサイドアップにしているが、見間違えようなない青い瞳の少女。

そして、黒い髪のショートヘアーの少年。

最後に茶色の髪、緑の瞳をした女の子。

――ああ、遅かったようだ。

もう、生まれてしまっていた。

でも、どこかオレは安堵していた。

「――」

それだけみると、オレは踵を返し、歩き去ろうとするが……

「お兄ちゃん？」

……気付くと、茶色の髪の少女がオレのコートの裾をつかんでいた。

――ヤバイ、三人の視線が俺に集中してる。あんまりいい予感がしないよ

「君は？」

この世界のさくらがオレに聞く。

「水無月悠二だ。魔術使いをしている」

「っ!？」

オレのカミングアウトにさくらの顔が歪む。やはり、オレの知るさくらだ。

「——その魔術使い君がなんのようかな？」

「そんなに警戒しないでもいいよ。ただ、見にきただけだから」

「みにきた？」

そう、とこたえ桜を見る。

見上げるほどに巨大な垂れ桜。

「この不完全な願望機をね」

「っ!？ どうしてそれを・・・」

「さあ、な」

適当にはぐらかすと、桜に手を翳す。

——解析、開始

魔術回路を起こし、桜自体に魔力を流す。いまのさくらにこの樹を

完成させることはできない。

だが、オレは未来からきたんだ。
未来のさくらは、こいつの修正プログラムを組めてたんだ。

解析、完了。

まだ全然余裕で間に合う。

「キー刻印、セット起動」

全体を把握したオレは背中に刻まれている魔術刻印に刻まれていた
修正プログラムを起動させる。

どうやら、あいつはこんな日が来ることを読んでいたらしい。

——よし、順調に読み込んでんな

「な、何をしてるのっ!？」

「——」

悪いが答えられるほど余裕がない。
如何せん、情報量が多すぎる。

あゝ、なんかサポートの礼装でも作りゃよかった。
簡単ななら今日一日で出来たのに

しかし、どれくらい時間が立ったかな？

「ふう・・・」

とりあえず、作業完遂。
これで、桜の暴走はない。

「――」

気づくと、さくらがオレを睨んでいた。目が説明しろといっている。

「――いまから話すことは誰にも言わんでくれよ？ 芳乃さくら？
」

「どうしてボクの名前をつ！？」

「それはな、オレが」

――未来から来たからさ

「えっ！？」

言うと、驚愕するさくら。

まあ、当然と言えば当然だな。会った子が未来人でしたなんて、面白くもないジョーク以下だ。

「証拠に、オレは枯れない桜の修正プログラムを持ってる」

「誰が、作ったの？」

「未来のお前だよ、さくら」

「――やっぱり。ボクは・・・」

「オレが聞いたのは、お前が桜に吞まれたことだ。オレがあつたのはロンドンだ」

——そう、オレがさくらを見つけたのは本当に偶然だった。とある仕事で魔術協会の本部、ロンドンの時計塔に用があつたときだ。

宿舎にかえるときに、偶然見つけた桜の枝を携えた少女。それがさくらだった。

記憶を失っていた彼女を、オレは見捨てられなかった。
——そして、気がついたらさくらがオレのなかで『大切な一』になつていたんだ。

「——」

「それから色々あつてな。あちらで居場所がなくなつちまつたモンでな。」

オレが気まぐれで魔術を教えたら、あつという間に追い抜かれ、目をつけた宝石翁の修行を経て、第2魔法を開眼した。

そのせいで封印指定されて、代行者とか封印執行者に終われまくつたからな。

しまいには空想具現化だ、チート過ぎる。

さくら「なにしたの？」

「いや、いろいろとな」

——お前が原因だ。

なんて、口が裂けても言えない。

「まあ、オレって異分子が入った時点で、もうパラレルワールドだろうな」

心配なのは、世界の修正力だな。

「——ちなみに、君って何歳？」

「数えてねえからわからねえけど、成人してたよ。たしか」

酒とか、タバコもやってたからな。

「でも、見た目は・・・」

「ああ、未来で致命傷を何個も貰っちゃってね。あちらのさくらが体を修復するために退行させたんだと思う」

「す、すごいね。」

「「ポカーン」」

およ、忘れちゃってたな。

さくらとオレの話についていけずに、二人はポカーンといった感じでたたずんでいた。

「すまんすまん、君達名前を聞いてもいいか？」

「えっと、桜内義之です！」

元気よく義之が名乗る。

「――」

女の子の方は、ジッとオレを見たままにも答えない。

「君は？」

「名前、ない」

「芳乃？」

「うにゃ、名前をつけてあげたいんだけど、嫌がって」

嫌がるって、なんでだよ。

「名前、頂戴」

「――オレでいいのか？」

着ているコートの裾を握ったまま、オレを見上げる少女。
それはどこか、当の昔に死んだ義妹を彷彿とさせていた。

「うん♪」

「コクン」

さくらの方を向くとうなずいた。
逃場なし、か。

「そうだな、湊。ながせみなと永瀬湊ってのはどうだ？」

「ありがとう」

嬉しそうに笑う湊を見て、オレも少し笑う。

「――改めて、ありがとう。悠二くん」

「いや、それほどじゃないさ。オレはさくらとの約束を果たしただけだ。芳乃」

そういうと、オレは歩き出した。

「また、会えるかな？」

「会えるさ、嫌でもな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2175q/>

魔法少女リリカルなのは ～世界を変える者～

2011年12月25日18時55分発行